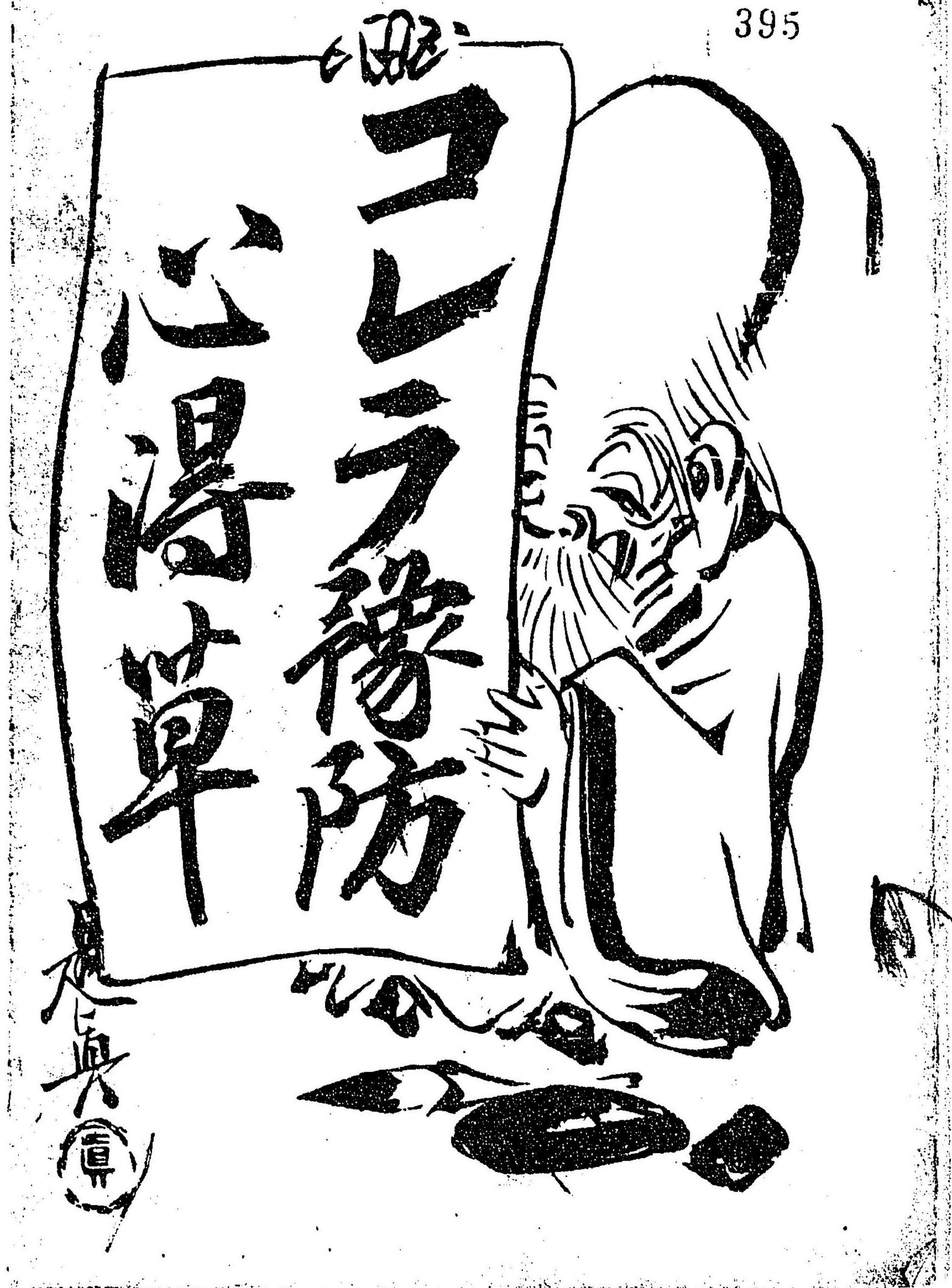


特 37

395



059265-000-6

特67-395

コレラ予防心得草

小田 耕作/述

M13

CBF-0124



虎烈刺病豫防心得草

凡そ此世の中は。何が第一大切の寶ぞといふは。
 吾が命より外は。何れが貴きと
 多く賤きと多く。金のわしいも。家庫の建て
 ないも。よき女房の持ちないも。美しい衣服
 の着ないも。酒の飲まないも。旨いもの食
 ないも。物見遊山は。行きないうも。嬉しいこと
 や。楽しいこと。其わの世間は。何ら由
 る望とごと。命ありての物語り。體ありての

樂たのしみとあり。譬たとへへ三千世界さんぜんせかいは充みち満みる。金銀珠玉きんぎんしゆぎよくが
 何なにまばとて。命いのちよめ人の寶たからは何なにるまい。そこを其その
 寶たからを失しはぬやう用心ようじんするが。人間第一にんげんだいいちの勤つとめ亦また
 り。諸もろ毎年まいねん々々夏なつはあると。虎烈刺こりよくといふ。悪い病やまい
 が流行りゆうこうして男おとこでも女おんなでも老人らうじんでも小兒せうじでも鬼おに
 を欺たぶらかむく勇士ゆうしでも此病このやまいを煩わづらつたら大變たいへん吐えき下くだ
 しを初はじめてうら死ぬまごの間まごのまひだの半日はんじつでも一日いちじつ
 でも。七轉八倒しちてんぱつたうの大苦おほくとせした何なにがと。終つひは往生じやうじやう
 する。怖こわい恐おそしい病やまいゆへ皆人煩みなひとわづらりぬやうは用心ようじん

せんし。あれども。唯恐ただおそしい怖こわいと思おもふがかりで。
 肝心かんじんある用心ようじんの仕方しかたを考かんがへ結むすば。決けつしてとり付つ
 りまぬとい。請合うけあがとし。由よして。その恐おそしい虎烈刺こりよく
 も。決けつしてとりつらぬ。確たしかある豫防よぼう法ぽうと。左ひだりは恐おそし
 く記きをぬ名な能よと讀よむと能よく覺おぼえ。妻子眷属さいしけんじゆくの勿論もちろん
 懇意こんい知己ちぎも。語かたりつたへて。共ともは長生ちやうじやうを樂たのし
 まうべし。苟かまにも用心ようじんを怠たらぬ。いづれのやうは劇げき
 しい虎烈刺こりよくでも。決けつして杞しそする。足たらざるか
 り。

コレヲ病豫防法

茅一 毎朝もやと起て。家の内外を掃除し塵芥

ふどりの。たまらぬやう。清潔にすると肝要あり。

茅二 銘々の家業を精出して。怠らざるに勿論

常より一層勉めて稼ぐべし。身を懶惰に持

つり。総て虎烈刺めとりつと媒介と心得べし。

茅三 何れど熱き夜よても裸に勿論單物一枚

ふど。ふんで薄着の儘よて。睡るべし。

茅四 毎年夏の初めより。秋の末に至るまで。六五

七八九の頃。幅廣きモンパ。又ハアラ子ル。又ハ水

綿等よて。夜晝とも。常は腹部を二重に巻き置

とべし。

茅五 木綿の袖ふし襦袢。綿入は。又ハモ

し。せぬしらへ。置いて。毎夜寝るまへに。必ら

着用して。寢床に入らべし。平日夜晝とも。腹巻

せして。毎夜寝る時。袖ふしの肌着襦袢を着

用するめが。虎烈刺病豫防法の内よて。茅一大

切のふとあれが。毎年夏の初めより。秋の末迄

勿論^{かろ}論^{ろん}の^の時^{とき}にて^ても^も熱^{あつ}と^と寒^{さむ}と^と不^ふ順^{じゆん}の時^{とき}
候^う又^{また}ハ^ハ毎^{まい}夜^よ肌^き着^ま襦^{じゆ}袢^{たん}と^と腹^{はら}巻^{まき}ハ^ハ必^{かなら}ず^ず忘^{わす}れ^れ
うらぐ。

茅六 午睡^{ひるね}ハ^ハ決^きして^てま^まぐ^ぐう^うら^らぐ。

但^たし^し。職^{つと}業^{ぎやう}又^{また}由^よて^て止^やむ^むと^と得^えざる^る人^{ひと}々^々又^{また}ハ^ハ小^こ
児^この^の午^{ひる}睡^ねせんと^とま^まる^る時^{とき}ハ^ハ前^{まへ}ハ^ハ記^しを^を袖^{そで}あ^あし
襦^{じゆ}袢^{たん}を^を着^ませ^せ。帯^{おび}を^を括^{くわ}め^めて^て。夜^よの^の通^{とほ}り^り。夜^よ具^ぐを^を着^ま
せて^て寝^ねう^うら^らぐ^ぐべ^べし。

茅七 小^こ児^こハ^ハ右^{みぎ}の^の袖^{そで}は^はし^し襦^{じゆ}袢^{たん}も^も熱^{あつ}と^との^の節^{せう}ハ^ハ

忌^いみ^み嫌^{きら}ふ^ふもの^のあ^あれ^れハ^ハ父^{ちち}母^{はは}又^{また}ハ^ハま^まぐ^ぐべ^べて^て年^{とし}長^{なが}ま^ま
る^る者^{もの}小^こ児^この^の傍^{そば}ハ^ハあ^あり^りて^て小^こ児^この^のよ^よく^く睡^ねう^うを^を待^{まち}
ち^ちて^て肌^き着^ま襦^{じゆ}袢^{たん}を^を着^ませ^せ。其^{その}上^{うへ}ハ^ハ帯^{おび}を^を括^{くわ}め^めて^ての^のら^ら。
寝^ねう^うら^らぐ^ぐべ^べし。

但^たし^し。小^こ児^この^の襦^{じゆ}袢^{たん}ハ^ハ胸^{むね}の^の邊^へと^と腰^{こし}の^の邊^へと^と二^に
所^{ところ}ハ^ハ紐^{ひも}を^を付^つけ^け置^おき^きて^て。む^むま^まぐ^ぐべ^べし。

茅八 他^{ほか}ハ^ハ病^{やまひ}あ^あけ^けま^まバ^バ夏^{あつ}より^り秋^{あき}ま^まで^でハ^ハ老^{おい}若^{わか}男^{おとこ}

女^めと^とも^も。毎^{まい}日^{にち}入^い湯^{とう}せ^せる^るが^がよ^よし。

茅九 入^い湯^{とう}ま^まと^とハ^ハ新^{あたら}浴^ゆし^しな^なる^るめ^めち^ちハ^ハ涼^{すず}む^むの^のら^ら。

別して快きものあれば思ふはあらば涼みを
まぎて邪氣を受ること多きゆゑ入湯新浴の後
ハ必らび涼みまぎぬやうに用心せし。

第十 食事ハ朝晝夕と日は三度に定め置まき
間食ハ決してまぐらうべ。

第十一 虎烈刺病流行の節ハ左とん珍しき
客の來ることあるとも食事の時刻にてあけ

まバ強いて飲食せまぬやうに心掛べし。
第十二 深夜ハ決して飲食まぐらうべ。

第十三 魚鳥獸の肉其外何品でも煮焼したる
物の一夜をたしたるハ決して食ふべ。

第十四 熟さざる菓物の決して食ふべ。
第十五 汲溜め置たる水の決して飲むべ。

第十六 房事の後直に睡ま就くべ。
らに散歩するや又ハ柱ぶどを押して力を採
み出し運動して少し汗の出る位はありて後
睡るべし。



○ドウレテア〜
 ど〜も頂日ハ
 気が付て

後を
 寝ひえの
 用心を
 はじめた
 からモウ
 コレカラハ
 我々の
 仕事も
 泣き物
 ゴロウ
 イッソの
 天竺へ
 高志と
 出〜
 小虎
 親父さん
 死ぬと
 食ら
 私
 襦袢を
 着せ



襦袢を着せ

○オチ〜
 兄を
 心
 日本
 まだ
 食ひ
 寝
 又裸
 見
 とつ

○身主
 命が
 毎晩
 急な

○女房
 さ
 お
 忘
 小使
 とつ



△
 流
 大
 女房
 馬
 女房

第十七 何とあく飲食くわんじきき、まじ。強つよいて飲食くわんじきを
 せば。胸むねはつうん。下腹げふくへおちつうぬやうある
 心地こころさるん。前日ぜんじつは食くしたる物ものが。未まだ消化くわあせ
 ば腐敗くさせり。腹はらの内うちは残のこりて何なにも故ゆゑあり其儘そのま
 ば捨置すており。或あるは口くちがまづしとて。強つよいて旨うまき物もの
 を食くしあどせば。大變たいへんふことよあるゆゑ急いそぎ
 て醫者いしやの療治りやうぢを受うくること第一だいいちあり。
 第十八 虎烈刺病こりやくしやうの原因げんいんは全まるく感冒かんぼうより起おこる。
 その感冒かんぼうは夏なつより秋あきへうつけて。受け易うけやすきもの

あり。何故なげあれば夏なつの初はじめより秋あきの末すえまで。
 人々ひとびと肌膚くわふもるみ。腠理さいりひらけて志しまらざる故ゆゑ。
 外邪げんを受け易うけやすきものあり。あれども熱あつさの節せう
 々々。左ひだりより外邪げんを受けても。格別かくべつのこととも思おも
 はる。右みぎは初はじめの内うちは。何なにとあく氣分きぶん重おもく。手足てあし
 だるく。又または頭痛づはうあどして。食事じしのまじまぬは。
 暑氣あつ何なにたり。又または時候じこう何なにたりあど。云いて少し
 も恐おそまじ。邪氣じゃきの何なにも上うへより。又また邪氣じゃきを受け思おも
 はる。邪氣じゃきを重おもく終つひに此病このやまいを發はせしもの

あまき。初め。用心。して。邪氣を受けぬやう
日心掛べし。

第十九 毎朝早く起きて。小便の色を見らるべし。
起たて。誰づも。睡氣がさめぬ。志氣の付ら
ぬ。そのあれども。其所が。一番氣を付けぬ。あ
らぬ所。で。若し。少し。ほても。小便の色變りて。黄
色。り。又ハ。赤色。あり。バ。決して。朝飯を食ふてハ
ありませぬ。若し。少し。にても。小便の色。又變り
が。何事。を。措ても。直に。醫者。に。診て。貰ひ。

早く藥を服用せん。儲それからの。頻りに食
物がわしくある。で。何ら。ふが。其處が。大切。あれ
バ。よ。く。氣を付け。大根の煮付。り。ま。この。梅
干。が。ら。ひ。ま。を。粥。を。平日の。半分。わ。ど。も。食。る。が
よい。ある。ん。ど。其。上。夜具。り。蒲團。を。被。り。て。汗
をとる。やう。は。せん。

但し。醫者の。許。を。ま。で。ハ。一切の。魚類。油類。餅
類。菓物類。など。を。食。さ。ず。ん。

第二十 小便の色變りて。黄色。り。又ハ。赤色。あら

外は少しの障りありとも。直に醫者の診察を受け、手當の藥を服用せし。前にも記した通り。命は換つる寶はあまきゆゑ。自分勿論妻子眷屬下男下女に至るまで。毎夜寝るまゝ又のふあし袖あし襦袢の肌着を着用せし。後は寢床に入るやうに。能々申し諭して。其通り以たせし。而して毎朝家内中の者々一同招びあらめ。小便の色は變りのあらはし。せよとくく聞き糺し。萬一少しにて。小便は

色づくことあり。至急は醫者せためきて。治療を受くべし。決して隠さば。何故あれ。小便が色づきてより。コレラよあるまで。五六日わど前のことあれば。嘔吐もあつて下利もあつて。コレラといふ名もあつて。又死ぬる氣づき。ひもあつて。他人は忌み嫌はる。心配もあつて。至つて簡易に濟むことあれば。決して隠さば。及ぶぬあり。若し心得あつて。隠さば。又の隠さぬまでも。今夜の直る。明朝の癒る。あ

ど。醫者よもめくらん。油断するうち終よコ
ロリと死なまはうら。うらまはうら。右の豫防法
を堅く守る。片時も怠またまふあて云爾。

○ 古歌よ

養生の病いの由ぬ手當あり其用心を前へてせよ

世よ今年の花は見つ嬉しきもの命ありかな

明治十三年五月三十一日 翻刻御届

施本 不許 賣買

荏原神社祠官

翻刻施本者 本多正國

東京府下荏原郡南品川二百三番地

筆記者 秋山光條

口述者 小田耕作

